

農園を訪ねて<その2>

アグリコ農園

日本の農園を紹介する不定期シリーズの2回目は茨城県つくば市の農産物オーナー制度に取り組む農園であるアグリコ園を紹介する。

アグリコ園のある、つくば市古来（ふるく）地区は水田が多い農村風景が広がる地域だが、つくば市の都市化を反映し、専業農家はごくわずかである。園主の小島馨さんも現役時代には農業に従事せず、10年程前の定年退職をきっかけに、親から引き継いだ農地で農業に取り組みだした。

つくば市の農産物オーナー制度は2006年度から実施している施策で、アグリコ園は6年ほど前から関わっている。アグリコ園の参加費は四季コース1万円、春秋コース7千円となっていて、参加者は月に1回のペースで、様々な農作業体験ができ、収穫時には採れたての野菜を持って帰ることができる。市のオーナー制度では、農業者は参加者に対し農産物の最低配布量の保証をする必要があり、アグリコ園の場合はショウガ5kg、ジャガイモ10kg、タマネギ10kgを保証していた。

アグリコ園の圃場は野菜中心の第1農園（15a）と、果樹中心の第2農園（13a）で構成され、春作、秋作あわせて約20品目を栽培する。定番の野菜の他、赤や黄色のパプリカや中身の赤いダイコンなど色取りが鮮やかで参加者の興味を引く品種を取り入れたり、収穫作業が楽しく人気が高いスイカ、トウモロコシ、ゴマ、ラッカセイなどは年毎に入れ替えて栽培し、リピーターが毎年、新鮮な体験ができるようにしたりしていた。

我々が訪問したのは、2020年の10月24日と12月5日のイベントの日であった。10月には、サトイモ、ハウレンソウ、ショウガ、葉野菜の収穫。12月5日はダイコン、ハクサイ、ネギ、などの収穫を行い、さらに野菜鍋パーティーもあるという、それぞれ、盛沢山な内容であった。両日とも、30人程度の参加者が集まったが、新型コロナの影響もあり、当日の説明は参加者同士の距離を確保して、簡単なものとしていた。いざ、参加

者全員が畑に入ると混雑した印象になるが、小島さんが要領よく参加者をそれぞれの区画に誘導するので、混乱はなく予定通りに作業は進んでいった。経験に基づいた周到な準備と現場で計画通りに活動を進めていく段取りの良さに感心した。

小島さんからは、オーナー制度を実施するにあたっての工夫について話を聞き、学ぶところが多かったが、印象に残った工夫として、原則雨天決行とするということがあった。雨天時の活動のために、近隣施設の軒下を借りられるように手配し、例えばトウモロコシの収穫の場合は、トウモロコシを茎ごと刈り取っておいて、当日、参加者は軒下で、茎からトウモロコシをもぎ取る作業をすることで、収穫の楽しみを味わうことができるようにした。こうすることで、活動はほぼ、計画通りに実施され、参加者との日程調整業務はほとんど生じないようにできているという。

話を聞いていると小島さん自身が、常に農業の面白さや採りたての野菜のおいしさを発見して楽しんでおり、その新鮮な気持ちを参加者に伝えようとされていると感じた。また、参加者がどんなことを喜ぶのかもよく観察しており、それを活動に反映させていることが、アグリコ園の人気につながっていると感じた。

アグリコ園の活動はリピーターも多く好評だが、小島さんは6年間続いた活動をひとまず休止した。体調を考慮してのことであるが、農業をやめたわけではなく、現在も果樹栽培中心に取り組んでいる。その元気な様子を見ると、体の負担にならない範囲で、またオーナー制度を再開してほしいと思う元参加者は多いだろう。



参加者に説明する小島氏（中央）